

2016年5月27日の想い

～子どもとともに学ぶリアルな平和教育のあり方を考える～

- 1 はじめに
- 2 教員自ら学ぶこと
- 3 子どもとの学び
- 4 子どもとともに考える平和

今次教研で論じられた内容と今後の課題

今次教研では、吉井美知子さん（沖繩大）と谷良純さん（相賀小）を助言者に迎え、それぞれの報告者をもとに、以下の 2 本の柱にそって討議を深めた。

（1）学校行事や授業を通じた平和学習のとりくみ

桑名支部の水谷さん（城南小）から「やなせたかしの想い」という報告がされた。「アンパンマン」が、やなせたかしの戦争体験からつくられたという作者の想いを知ることで、平和について考えさせる実践であった。アンパンマンという身近な題材から、子どもたちも親しみやすく、いきいきと学習に参加することができた。

亀山支部の伊崎さん（関小学校）から「“へいわ”ってなにかな」という報告がされた。絵本『へいわってすてきだね』『ぼくがラーメンたべてるとき』を教材として、1年生に平和について考えさせた。挿絵から、戦争のこわさ、日常生活のありがたさが十分伝わり、1年生が平和について考える題材として効果的であった。

三泗支部の山中さん（大池中）から「第五福竜丸事件について」という報告がされた。修学旅行にむけての事前学習で『トビウオのぼうやはびょうきです』を読み聞かせた。中学生であっても絵本から学習への興味を喚起させることは有効であった。修学旅行では、第五福竜丸展示館を見学し、ビデオで元乗組員の話聞くことで、乗組員が感じた死の灰の恐ろしさ、保存運動に寄せる思いについて知ることができた。

志摩支部の谷口さん（答志中）から「沖繩と答志をつなぐ修学旅行のとりくみ」という報告がされた。事前学習では、地域のお寺で戦時中の答志の話聞き取り、お寺にある墓石から戦没者を調べ、沖繩で亡くなった答志の方々がいることを子どもたちは知った。そして、修学旅行にて平和の礎に刻まれている名前をたしかめ、自分たちの答志と戦争のつながりを体験的に感じることもできた。

名張支部の小倉さん（すずらん台小）から「2016年5月27日の想い～子どもと共に学ぶリアルな平和教育のあり方を考える～」という報告がされた。オバマ大統領のヒロシマ訪問について、オバマ大統領はヒロシマに何をしに来たのかという子どもたちの素朴な疑問を元に、その是非について話しあう授業が展開された。

志摩支部の伊相さん（志摩中）から「志摩中学校の平和教育の取り組み」という報告がされた。全校一斉に平和学習にとりくむ日を設け、1年生は「島唄」がつくられた背景と唄にこめられた思いを知る学習、2年生は「夏服の少女たち」を視聴して自分たちの将来やこれからの平和を考える学習、3年生は「少女たちの戦争～197枚の学級絵日誌～」を視聴して戦争が起こる原因や戦争をなくすためにはどうすればよいかを考える学習をおこなった。

度会支部の木田さん（度会中）から「ともに学び、語り継ぎ、平和な社会を築く一員であるために」という報告がされた。国語科で「詩歌にみる戦争の非人間性」をテーマにして話しあうなかで、「誰しもがもっている弱さや残酷さも人間らしさの一つ」「非人間性も個性の一つで一概に否定はできない」などの意見が出た。そして、戦争にむかう全体主義（ファシズム）と民主主義の価値について考え、「わたしの民主主義宣言」のとりくみをおこなった。

伊勢支部の森嶋さん（進修小）から「日常的な平和学習の上に立つ基礎と発展」という過去三年間の3年生と6年生でのさまざまなとりくみについて報告された。発達段階に応じて、平和について考えさせる機会は、指導者しだいで十分につくれることをたしかめることがで

きた。そして、子どもたちが考えたこと、学んだことを学級通信でいねいに発信していくことで、保護者、地域にも啓発することができた。

(2) 地域教材をいかした平和教育のとりくみ

員弁支部の水谷さん（藤原中）から「子どもたちにつながっていく平和学習」という報告がされた。支部青年部が授業をつくり、実践報告集を作成していくという継承的、伝統的なとりくみ報告であった。中学生、小学校高学年グループでは、戦争体験者の話を資料化して子どもたちに知らせ、その方に手紙を書くという活動をおこなった。

松阪支部の脇野さん（山室山幼小）から「地域の戦争の記憶を伝えるために」という報告がされた。松阪教研の平和教育部会で、元特攻隊員の方の話や行政チャンネルの内容をもとに教材作成に力を注ぎ、戦争体験の記録DVDを作った。これまで口を閉ざしていた方々が、近年、戦争体験を語りはじめるようになったのは、現在の日本の状況に危機を感じるからであるということをつきかめることができた。

伊勢支部の辻さん（明野小）から『自分史を振り返った教材の追求と、今、語り継ぐべきことは何か』を考えて」という報告がされた。全校児童にむけた平和学習会をおこなった。戦場から生きて帰ってきた実父の手記や短歌と、広島と沖縄に赴き撮影した写真資料を用い、戦争について知らせた。また、遠い場所の話ではなく、伊勢の戦跡も知らせることで、戦争が身近にあったことを感じさせることができた。

紀北支部の濱田さん（三木小）から「松夫おじちゃんの話聞いて」という報告がされた。90歳をこえる地域の戦争体験者から、当時の様子についての聞き取りをおこなった。意欲的に質問する子どもたちの姿があり、これからは戦争のない世の中にしていけたらいいという思いをもたせることができた。

成果と今後の課題

今次教研では、昨年度に比べ報告書数が倍増したことが、まず大きな成果だといえる。そして、それぞれの実践報告からは、報告者の想いが授業や活動をつくり、実践につながっていることを助言していただいた。また、討議のなかでは、主に以下のようなことが話題となった。

一つめは、授業者の内容の取りあつかい方についてである。子どもに考えさせる手法として、教科書のわずかなコラムをクローズアップして授業を展開することもできるし、反対に、広い内容の一部分に焦点化していくことも可能である。そうした、授業者のねらいや思いをもつことの大切さについて考えることができた。同時に、教員が子どもたちとともに考えていく姿勢をもち続けることも大切だと感じることもできた。

二つめは、本物と出合わせ、戦争の事実を自分とつなぐことについてである。自分の住んでいる地域にあった戦争を知ることで、自分と地域がつながる。また、曾祖父母はどのようなくらしをしていたか、祖父母は？父母は？と、自分の家族とのつながりを考えることが、今の自分とつながり、自分の命ともつながることになる。他人事ではなく、自分事として事象をとらえられる指導をしていかなければならないことをたしかめることができた。

課題としては、昨年度の県教研でもあげられたように「憲法」「原発」「沖縄」などの現代社会の問題を取りあげた実践報告が少なかったことがあげられる。また、各分会、各支部によって平和教育のとりくみ方の差が大きいことも課題である。まずは身近なところから、身近な人とできることを考え、実行に移していくことが今次教研でも確認された。

1. はじめに

わたしは平和学習をおこなう際、子どもたちにはまず自分のことを伝えている。わたしの祖父母は長崎県長崎市出身の原爆体験者だそうだ。このだそうだとは、わたしが高校生のときに祖父母が他界したのだが、それまでに2度しか会ったことがない。被爆者ということを孫に隠し、会いたいけど会っては迷惑がかかると考えていたと、葬儀のときに母から聞かされた。原爆、未だに当時の記憶や後遺症で苦しみのあるなか、さまざまな訴えや平和を祈るといった行動をされている面はメディアの報道や教育の過程で知ってきたが、報道等では見えてこなかったよりリアルな一面を身内から知ることになり、怒りや悲しみに近い、不思議な感覚になったことを覚えている。

教育者として教壇に立つ今、平和学習をおこなうことにむずかしさを感じることもある。今ではむずかしくなってきた戦争を体験された方からの貴重なお話を聞かせていただく機会をもつことや、教材を通して平和の大切さを子どもたちに伝える指導を心がけてきたが、どれだけ子どもたちにリアルさをもたせることができたのだろうか。リアルさをもたせる必要はそもそもないのだろうか、疑問をもちながらの平和学習に正直な所なっていた。

そんななか、2016年5月27日にアメリカ合衆国大統領が広島を訪問するというNEWSが飛びこんできた。このNEWSは国内外で大きな話題となり、学識者によるさまざまな憶測や見解がメディアのあちこちで見られた。もちろん子どもたちにもこの話題は認識されるものになった。

自分自身も、アメリカ合衆国大統領が広島を訪れることに興味をもちながらも違和感が残った。そうして迎えた2016年5月27日、バラク・オバマ前大統領が広島を訪れ、被爆体験者とハグを交わし、約17分間にもおよぶ演説をおこなった。当然メディアも「歴史的瞬間」「歴史的ハグ」などと大々的に報道した。

ある程度学校でも話題にあげていたこともあり、次の日の朝、子どもたちから「先生昨日の演説見た?」「おじいちゃんと抱きあってたな」との話があったなか、「で、結局オバマさんは何しにきたん」と問いかけがあった。明確な返答ができず、正直に「先生もわからん。みんな調べよか」と述べ、この学級での平和学習がスタートした。子どもに教えるのではなく、子どもとほんとうの意味でともに学ぶことでリアルさをもてる平和学習になるのではと期待を込めつつ・・・

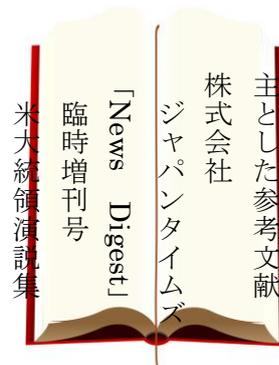
2. 教員自ら学ぶこと

ネット上にはすぐに演説の様子がノーカットであげられ、全文収録CDと翻訳本もすぐに発売されたこともあり、教員自ら学ぶ環境はある程度身近に整っていた。

しかし、いくら演説を聞いても、著書を読んでも「結局オバマさんは何をしにきたん」に返答できるほどの理解はできなかった。

そこで、実際に我々教職員の仲間はこの事実をどのようにとらえているのだろうか、広島の現地の方々はどのような気持ちで迎え入れたのだろうか、オバマ大統領の近くで働く人々はどのように思っているのだろうか、さまざまな疑問を解決するべく計画を練った。

- 1, 三教組青年部広島平和祈念行動に参加し現地で取材をおこなう
- 2, 伊勢志摩サミットでの護衛警察の方にお話をうかがう
- 3, 伊賀・名張支部平和学習会での意見交流



上記の計画を子どもたちにも伝え、「先生も勉強するから、みんなもいっしょに平和について学んでいこうな」と、子どもとともに学ぶことを約束した。

(1) 三教組青年部広島平和祈念行動に参加し現地で取材をおこなう。

広島原水爆禁止世界大会では、高校生平和大使の話で「平和の原点は、皆が人の痛みをわかる心をもつことです。」と世界にむけ発信した。本気で世界を平和にしたいと考える人がたくさん集う雰囲気には圧倒された。

「見て、聞いて、学ぼうヒロシマ」では、最初に被爆体験者からのお話があった。原爆投下当時の町の様子を細かくお話いただき、惨状に対する苦しみ、憤り、悲しみが伝わり、また、だからこそ未来を大切にしているお気持ちも伝わった。ただ、なぜ、祖父母はこのような話をわたしに隠し、また会うことすらしなかったのか。お話をされた方の気持ちも伝わったからこそ疑問が生じた。

次のお話のなかには国との法廷闘争のことや、被爆者手帳のことが出てきた。そのなかに「今なお、被爆者認定手続きと被爆者手帳取得のために努力をしている人がいる」という内容が出てきた。「なぜ今、、わたしの祖父母は、、」受けてきた教育や報道等では知り得なかった事実が釘付けになった。中身は「被爆二世や被爆三世の人たちの努力」「息子や孫に迷惑をかけたくないという思いから、息子、孫が成人したタイミングを見て」というものであった。わたしの知りたかったリアルな一面がすっかりとはいかないが、祖父母の思いに少し近づけた気がした。ただ、息子、孫世代にまで病的、社会的、心理的に大きな影響を与える原爆をあらためて「恐ろしい核兵器」と認識した。

平和記念式典は毎年同じ場所で同じように執りおこなわれているはずなのに、それぞれの立場でそれぞれの思いで、何万人もの人がそこに集い、式典に臨んでいたのも、厳かかつ新鮮なものであった。ただ、一つ共通していたもの、それが「平和」への願いであったことはその地にいた人なら誰しもが感じていたはずである。その願いを感じるだけでも、式典出席には大きな価値があるように思える。

上記は今回行動に参加させていただいて学んだことや感じたことをつづったりレポートの一部である。そこに集まる人々がそれぞれの想いや立場があるなかではあるが「平和のことを考える」という部分では共通していた。そんななかで取材をおこなった。

○広島平和記念資料館

『今回のオバマ大統領広島訪問には本当に感謝しております。ましてや、折り鶴をご自身で四羽折られて持って来て頂き、資料館で出迎えてくれた、子どもに二羽、メッセージを書いた記帳台に二羽置いて頂いたこともあり、大変感動もいたしました。まだまだ日米の間で越えなくてはならない壁はいくつもあるとは思いますが、これまで誰もなしえなかった、現職米国大統領の広島訪問が実現できたのですから、ここからはじめられることを皆で考えていきましょう！折り鶴は皆の心をかならずつないでくれると信じています！』

「オバマ大統領さまへ 今回、広島平和公園を訪問し、慰霊碑に献花をされ、犠牲者に心を手むけ、被爆者と笑顔での対話や抱擁をされたこと、本当に感謝しております。さらに、たった10分程の資料館視察のなかで禎子の鶴を見て頂き、ご自身で折られた4羽の折り鶴のうち出迎えた小中学生に2羽手渡され、芳名帳にメッセージを書かれたあと残りの2羽を置いて頂いたこと、本当にありがとうございます。」(資料館展示資料説明より)

このように歓迎と感謝の意を資料館をあげて伝えていた。



写真左右 資料館展示

○平和記念公園内で平和を呼びかける人々の声と配付資料

資料からもわかるように、その人の生活背景や立場などで、現地でも意見が大きく分かれ賛否両論であった。また、現政権に対する批判的な声も多かったように思う。

○広島市内の人々

飲食店の店主を中心に、話を聞かせてもらったが、「三重から勉強しに来た」という立場を伝えると、多くは「原爆」のを中心に話をしてくれるが、同じくらい重要なこととして、当時盛り上がりも最高潮だったこともあるが、「広島カープ」のことも決まって話してくれた。市民の原爆への想いや団結力の一部が垣間見えた気がする。

しかし、オバマ大統領の訪問については、「よー来てくれた」「ここに来たことに意味があるんや」「あやまりにきたんちゃうんか」「なにしにきたんや」と、やはりここでも賛否があった。

被爆体験者から直接お話を伺うことは今回できなかった。報道されているあの歴史的ハグのときに流されていた涙から感じたことは、お話を聞かせていただいた市民のみなさんのような想いだけでなく、それよりももっと深い、そして複雑な感情が入り交じっていたように思える。

(2) 伊勢志摩サミット護衛警察の方にお話を伺う

三重県警総動員、また全国各地の警察が日本の誇りをもって世界の要人の護衛と周辺のを確保した伊勢志摩サミット。そこで勤務されていた方にオバマ前大統領が来日した当時の様子を聞いてみると「空想だと思ってた」と、ブラックボックス(核のボタン)のことを伝えてくれた。「非核の国に核のボタンが持ち込まれている。これってこの後広島に行くんやんなあ」と同僚たちと話していたと教えてくれた。

これが事実だと分かると、怖くなったし、やはりオバマ前大統領の訪問の意味がわからなくなってきた。



ネットニュース等では報道されているが、地上波ではほとんど報道されることはなかった。

(3) 伊賀・名張支部平和学習会での意見交流

「助けてください」と題し、オバマ前大統領のスピーチの全文を配布し、自分の思いとこれ

からの計画を伝えた上でさまざまな意見をいただいた。

(以下 出していただいた意見)

「スピーチのなかのアメリカの死者は具対数、日本の死者はばくつとという所に違和感がある」

「任期の最後の年での訪問というところに政治家だなあと感じてしまう」

「やはり来たことに意味がある。少しの進歩じゃないかな」

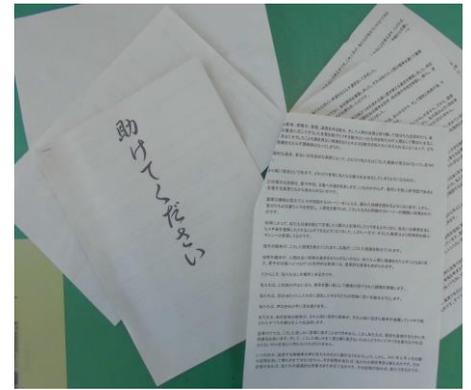
「黒人差別の対象だったこともあり、人の痛みに寄り添ったのかな」

「人ごとのように聞こえてしまうなあ・・・あやまってないし。よい大統領で終わりたいのかな」

「でも、オバマが落としたんじゃないからなあ。謝罪に意味はないと思う。むしろ、核のことをこれを機に考えられたことが大きいんじゃない」

「でも、核のボタンもってきてるよ」・・・etc

やはり賛否があるなかではあるが、教職員間でも活発な議論がなされ、「この議論こそが大切だと」まとまった。



3. 子どもとの学び

子どもたちも教員の学びに興味があるようで、「昨日伊賀の先生とかはなんていってたん？」と尋ねることや、新聞記事を持ってきて「アメリカの人々は日本に行くことに反対してるねんて」「アメリカでは原爆を使ったことは正しいってなってるで」などと自主学習をしてくるようになっていた。

そこで、自主学習の内容もみんなに紹介しながら、「みんなも授業で考えてみようか」と提案し、授業で話しあうために必要な知識を伝え、子どもとの学習がはじまった。

以下 指導案より

第6学年2組 平和教育（総合的な学習の時間）学習指導案

日時 11月9日（水）5限

場所 6-2教室

授業者 小倉 孝祐

1 単元名「2016年5月27日の想い」

2 ねらい

- ・原爆や戦争に関する関心を深め、自分の調べたいことを見つけ、社会時事に目をむけることができる。
- ・戦争と平和の意義について考え、自分なりの考えをもつことができる。
- ・過去を学び、現在を知り、未来の平和について自分なりの考えをもちまとめることができる。

3 教材と子ども

戦争の事実を知っていますか。	知っている 23 人 あまり知らない 0 人 知らない 0 人
原爆が落とされた場所を知っていますか。	知っている 23 人 あまり知らない 0 人 知らない 0 人
原爆が落とされた日付・時刻を知っていますか。	知っている 0 人 あまり知らない 6 人 知らない 17 人
オバマ大統領が広島に来たことを知っていますか。	知っている 22 人 あまり知らない 0 人 知らない 1 人

本学年の児童は これまで立命館国際平和ミュージアムへの訪問にむけた学習や、夏休みの自主学習、国語科「平和のとりでを築く」の学習などを通して平和学習をすすめてきている。長崎と広島に原爆が落とされたことはほとんどの児童が知っており、原爆の恐ろしさや人々の苦しみは話を聞いたり、映像を見たりすることによって理解している。しかし、「繰り返してはならない」「忘れてはいけない」と心情面での高まりは感じさせるものの、具体的な日付が答えられないなど、原爆投下の事実に関してはまだ認識が高いとは言えない。このことから、自分と別の世界のできごとであり「かわいそう、こわい」という感情やそのような恐ろしい世界はいやだという思いにとどまり、さらにすすんで自分自身が平和について考えていきたいという思いに結びついていない児童が多いことがわかる。

そこで本単元では、メディアでも「歴史的瞬間」として大きく取りあげられ、児童にも認識されている、2016年5月27日の「オバマ大統領広島演説」を取りあげ、原爆投下の事実を学び、人々の願いに寄りそい考えていきたい。

原爆投下の事実を学習し、広島・長崎の人々の願いや想いを考えていくなかで、アメリカ国内の反応も学習していく。投下当時のアメリカ大統領トルーマンのことば、『原爆の投下によって戦争が終結し、何百万もの命が救われた。』（1959年4月28日）のことばから、原子爆弾投下を正当化する論理は今も一般的にまかりとおっている。そのなかでオバマ大統領は「核なき世界」をめざす過程でノーベル賞を受賞している事実や、広島演説の際も原爆投下スイッチを持っていたことなども学習し、児童のなかに違和感をもたせ、「オバマ大統領広島演説」の意義を考えていく。

原爆投下の事実、広島・長崎の想い、アメリカの考え、オバマ大統領の演説、現在の原爆・・・これらのことを関連させ、学習を深め、児童どうして話しあいを重ねていくなかで、社会に目をむけ、平和を願い、自らの平和への考えをもつ児童を育てていく。

4 指導計画

(全8時間)

第一次	原爆投下の事実を知る。	1時間
第二次	広島・長崎の想いを考える。	1時間
第三次	アメリカ国内の反応を知る。	1時間
第四次	オバマ大統領について知る。	2時間
第五次	2016年5月27日「広島演説」について考える。	2時間 (本時2/2)
第六次	学習を振りかえり、平和について自分の考えをもつ。	1時間

5 本時の指導

(1) 本時のねらい

- ・オバマ大統領の広島でのスピーチをもとにし、自分なりの考えをまとめ、交流することができる。

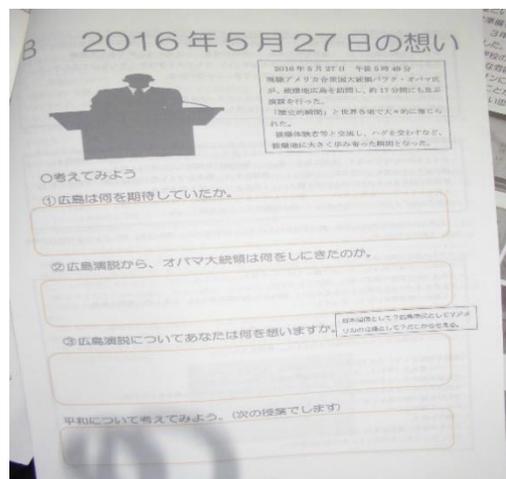
(2) 学習の流れ

学習の流れ	学びへの支援
<ul style="list-style-type: none"> • これまでの学習を振りかえる。 • 本時の学習課題を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 原爆投下の事実から、人々の想い、オバマ大統領の人物像に着目させる。
<p>「オバマ大統領広島演説」についてあなたは何を思いますか？</p>	
<ul style="list-style-type: none"> • 演説内容を読む。 • 自分の考えをもつ。(ワークシートに書く) • 交流する。 (1)ペアで交流 (2)全体で交流 • 学習感想を書く。(まとめ) 	<ul style="list-style-type: none"> • ワークシートに書きこむように指示する。 • 自分の考えの根拠を、これまでの学習や、文章のなかから示せるように指示する。 • 考えが出にくい場合は「よかった」「よくなかった」「意味がある」「意味がない」など、その場の状況に応じて立場を明確にし、話しあわせる。

以下、子どもたちの実際のワークシートと書いた内容、授業記録の一部を掲載する。



資料 A



資料 B

○資料 A に書かれた内容

- ・もともと弁護士 ・ 黒人初の大統領 ・ ノーベル平和賞を受賞している ・ 核なき世界をめざしている
- ・テロへの攻撃を指示した ・ 戦争をはじめた ・ お酒が好き ・ 広島にはじめてきた大統領
- ・世界から原爆をなくすことを目標にしているのはすごい。でもアメリカはたくさんもってるんやんなあ
- ・オバマさんも原爆は正しかったと心のなかでは思ってるんじゃないかな。
- ・なぜ広島にこようと思ったんだろう。
- ・三重県にも原爆のスイッチを持ってきてた人。その人がノーベル賞？
- ・世界にむけて戦争をなくしたいと伝えている人だと思う。 etc

○資料 B に書かれた内容

- ・広島の人はやっぱあやまってほしいと思っていると思う。 ・ 現地を細かく見て欲しいのかなあ。
- ・サミットのついでじゃなく、式典に来るべき。 ・ 別に何にも期待していないと思う。
- ・核のボタンだけはもってきてほしくない。 ・ 演説からは、戦争をなくしたいという願いがあると思う。
- ・世界中に注目されるために来たのだと思う。 ・ またノーベル賞を狙うため。
- ・人気ってトランプを倒したい。 ・ 逆になんで今までの大統領はこなかったのか。
- ・安倍さんもアメリカにかなあかん。 何か行動することが大切。 etc

これまでの平和学習や自主学習、調べ学習をもとにスピーチ聞き込み、読み込み、ワークシートに自分の考えを書いて意見を交流した。

○子どもの意見交流の様子

- 自分ももし広島市民なら、やっぱり謝ってほしいと思う。
 - ・これまでの大統領は来ていない、来たことで十分。
 - ・そもそもオバマさんが落としたんじゃない。謝れというのはおかしい。日本も悪い事実もある。
 - ・もし家族に被害者がいたら、やっぱり・・・
 - ・それはお墓参りで伝えたんじゃないか。
 - ・映像でおじいちゃんが泣いていた。悔しかったんだと思う。
 - ・うれしかったんだと思う。
 - ・このことで原爆がなくなれば広島はうれしいし、世界もうれしい。
- 演説では反省していうように思うし、核兵器をなくそうとしている。
 - ・ノーベル賞もとっている。オバマさんは戦争をなくしたいと思っている。
 - ・でも核兵器のスイッチを持ってきてるやん。実際アメリカはイスラム国と戦争をしている。
 - ・それはテロから守るために仕方がない。
 - ・でも核兵器や戦争をなくそうって言うてるやん。わからん。
 - ・テロって戦争なん？

- ・いっしょやと思う。
- ・アメリカが先に核兵器をなくせばいい。
- ・でも、言うてることは正しい。核兵器は必要ない。

核兵器が抑止力であるという論や、テロから戦争に踏みきる経緯について、ほとんど知識がないなかでの議論をさせてしまったが、子どもたちはかなり感情と熱を込めて話しあっていた。この感情と熱を込めた話しあいこそが平和学習をリアルにとらえ、自分ごととして考えていくキーワードになる気がした。

4. 子どもとともに考える平和

戦争のない世界。テロのない世界。みんなが健康に過ごせる。核兵器のない世界。こんなことばが子どもたちから出てきたが、なかには、「なくしかたがわからない」「まず、日本も、名張も犯罪とか起こってるし平和といいきれない」と自分事、身近な所に目をむけて意見を述べる子どもが出てきて、答えがなく、まとまりのない授業としてこの単元を終えてしまったが、少し平和学習をリアルに捉えられたようであると、子どもの姿から見る事ができた。

考えてみると子どもがしてきた議論の内容は、報道上での議論、教職員間での議論と大差はなく、わたし自身も平和について理想しか語れていなかったように思える。

しかし、この授業の後、子どもたちはすごく報道等への関心を高めてきた。

「12月に安倍さんが真珠湾にいくらしいで、授業する?」「日本は謝らなあかんやろ」「アメリカは謝ってないやん」「集団的自衛権について調べてきた」「原子力発電所も危ないで」「北朝鮮がミサイルの実験をしている」「またイスラム国がテロを起こした」

こういった声や自主学習ノートの内容が増えたことは今後にむけての進歩としてとらえたい。戦争への興味なのか、平和への願いなのか、方向の修正は今後必要であるが、

わたし自身、迷いながらの平和学習であったが、今回感じたことは、迷うなら子どもとともに熱をもって学ばばよいということ。今後の世界を担う子どもたち、歴史の事実を伝え学習することはもちろん必要であるが、現代社会は戦争・テロなど現状がどんどん様相をかえてきている。だからこそ、「今」の世界、「今」の平和に目をむけ、考えていきたい。そして「今」を学ぶからこそ、教える平和学習でなく、ともに「今」を学ぶ平和学習が必要だと、ともに学習してきた子どもたちに教えられた。

2016年5月27日の広島は、さまざまな感情、思惑が入り交じっていたのだろう。でも、遠く離れた所でも、そこでのメッセージを考えることで、平和について真剣に考えることができた。非核への想いを強くする者も出てきた。

だからこそ、体験者のお話や資料から、過去の戦争の事実や惨状を学び、原爆についての知識をつけ、平和を願う心を育むことが必要だが、ここで終わる平和教育ではいけない。過去を知り、平和を願う心を育むからこそ、「今」の世界、「今」の平和について考えることが大切である。2016年5月27日は、このことを我々教員に問いかけたようにも思える。

